



GOOD NEWS ときのこえ

War Cry

1月号
福音版
2026
January
No.2899

二〇二六年 一月一日 発行

明治二十八年創刊 福音版・毎月一日発行

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

ハレが満ちる正月

——キリストと囲む祝膳

山谷 真



日本では正月になると、多くの人が家族のもとに帰り、新しい年を祝います。この習慣には、「年神」を迎えるという伝統的な考え方があり、家の入口に門松を置き、お祝いの食事を共にすることで、家族に力と祝福がもたらされると信じられてきました。

その背景には、古くから

「新しい命を迎える」という思いがありました。これは、日本人に深く根づいた「喜びの時」の象徴です。お節料理を食べるためを使う「祝箸」は、両端が使えるようになっていますが、これは片方が人間、片方が神、という神人共食の概念を表していると言われています。

構造主義的に見ると、正月は「日常」と「特別」が交わる瞬間です。普段は分かれている世界が、この時だけ重なり、人々の心に新しい力があふれます。正月の行事は、単なる年中行事ではなく、ハレ—命が満ちる時—として経験されるのです。それは、私たちが普段忘がちな深い安心感を呼び覚まします。

実は聖書の世界にも、それと似た構造があります。イエス・キリストは全人類の罪を身代わりに引き受け

て十字架上で死に、ヨミに降り、復活によって死を命へと変えてくださいました（ヨミからかえる=よみがえり）。絶望から希望へ、死から命へという「反転」が起ることで、そこには新しい力と喜びがあふれ出します。

このキリストの出来事は、正月に込められた「新しい力が訪れる」という感覚と

重なって見えます。私たちの元へ来て祝福を与える

「訪れ」という構造は、

古代の日本人が正月に感じたものと似た形を取っています。ただし、聖書においては、「訪れるのは、一人の神の御靈」である聖靈です。

聖靈は、私たちを導く愛そのものであり、神の愛が聖靈を通して私たちの心中に注がれるのです。

そのように考えると、正月は家族の集まりを大切にしつつ、同時に「キリストが共にいてくださる」時として受け取ることができました。ヨハネの黙示録三章二〇節にあるように、キリストは戸をたたき、あなたと共に食事をすることを願つておられます。

「見よ、わたしは戸口に立つて、たたいている。だれかわたしの声を聞いて

（救世軍士官〔伝道者〕）

*1 祭りや儀礼で神に供えた食物を人も共に食べることで、神と人が同じ食卓を開む象徴的行為を指す。

*2 文化人類学で発展した立場で、人間の文化・神話・習慣の背後に共通する「深い構造」が働くと考える。表面的に異なった現象に共通パターンを見いだし、人間理解を深める方法。

わたしは中に入つてその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」

もし、あなたがキリストに対して心の扉を開くなら、

正月の食卓は、キリストが

祝福を注いでくださる「ハ

レの日」となるのです。そ

れこそが、本当の「ハレルヤ」でしょう（ハレルヤとは聖書の原語であるヘブライ語で「神をほめたたえよ」という意味です）。

新しい一年を迎える時、キリストは疲れた心を満たし、もう一度歩み出す力を与えてくださいます。日本の正月が昔から人々を励ましたように、復活のキリストもまた、私たちを新しくし、喜びの中へ招き入れてくださいます。その招きに応える時、心の中に静かな平安が広がつていきます。

今年の初め、ぜひキリストと共に歩む喜びを新たにしていきたいものです。

（救世軍士官〔伝道者〕）

神様の導きに生かされて



白石 京子さん

(救世軍横浜小隊所属)

生き立ち〜救世軍の中で育った幼少期

救世軍の小隊（教会にある）には年齢も人生経験も様々な人が集い、礼拝と互いの交流を楽しんでいます。横浜市南区にある救世軍横浜小隊に通う白石さん。地域での福祉活動に長く携わってこられた、その歩みの背景にある神様の導きをお聞きしました。

年に生まれました。

父が東京の救世軍麻布小隊（教会にある）に任命されました。朝から焼け野原にバラックを建てて集会を始めました。それは、住

私の両親は救世軍の士官（伝道者）です。私は七人兄妹の末っ子として一九四八年

父が東京の救世軍麻布小隊（教会にある）に任命され、朝から焼け野原にバラックを建てて集会を始めました。それは、住

父母の転任と共に、麻布から杉並、そして清瀬へと移りました。清瀬にいた時期が最も長く、九年ほどでした。年長になる頃から中学校二年まで、救世軍清瀬病院の敷地の中に住み、遊び場は、炊事場隣の砂場や大

戦後でしたから、お産婆さんが来て自宅での出産でした。その様子を兄弟も覚えていて、何十回も聞かされました。父は「神様は何でも聞いてくださるから大丈夫だ」と確信していたそうですが、本当に守られて無事に生まれたのだと言つていました。

学校を終えて生命保険会社に就職し、そこで夫と出会い結婚しました。翌年子どもが生まれ、生後一ヶ月の時、夫に辞令が出て、新潟へ六年間移り住みました。学生時代から救世軍の日曜学校や別会に毎週通っていましたが、外に出ると「うちはどこか普通と違う」と感じ、逃げたい思いもあって救世軍から足が遠のきました。

結婚と子育ての時代

きな石炭置き場、洗濯場の物干し台など、敷地のあちこちでした。怪我をしてもらつてから帰るようなこともありました。多くの人に見守られ、何をしていても皆が見ていてくれる、温かい環境の中で育まれました。



私が生まれた麻布小隊の部屋。この写真は家庭団（女性の集い）例会、1950年3月2日。

試練の時期

昭和から平成に変わる頃、夫が単身赴任中に胃がんのステージ3と診断され、横浜で手術を受けることになりました。その手術の当日、義父が四十度の熱で救急搬送され、私は二つの病院を行き来する日々となりました。

その三ヵ月後に母も召天しました。脳梗塞で入院して四日目のことでした。夫の家族が亡くなりました。懸命にやつてはいましたが、心に空洞が生まれたよう思います。



青少年部書記官フィリップス中佐を迎えての清瀬小隊青少年部集会

父との大切な時間

母の召天の一年後、今度は父が倒れました。父は救世軍の引退士官住宅で一人暮らしを始めていましたので、兄妹で日替わりで支えることになりました。私も



1965年ごろの両親 宮本重兵衛・マサ

会場に着くと、一つだけ空いていた席に案内され、隣を見ると、私の子ども時代に日曜学校で教えてくださった坂本明子少佐が座つておられました。二十数年ぶりの再会でした。その日の集会で坂本少佐と一緒に「恵の座」(説教壇の前に設けられた、ひざまずいて祈る場所)でお祈りをしたとき、心がストンと落ちるように静きました。

(神学校に相当)に入校しましたが、結核で天に召されましたが。当時八歳ほどだった父は、最も尊敬する兄から「酒は飲むな」「信仰をもて」と聞かされて、その頃からすでに士官になると心に決めていたそうです。そのような父の話を、私は毎週相づちを打ちながら聞き、あとから思えば、そのことで私の内に信仰の下地がつくられたよう思います。

週二回ほど通い、炊事・掃除・洗濯をして、父と一緒に昼食をとりました。

食事の後、父は「きょうはこの話」と自ら決め、牛おおい立ちや麻布時代、救世軍のことなどを語りました。

父は長野県松代の農家の十人兄弟の十番目でした。長兄は信仰に導かれ、救世軍士官となるために士官学校

救世軍への帰還

やがて父は脳梗塞で倒れ救世軍ブース記念病院に入院し、さらに、特養に移りました。病床での父の言葉や、見舞いに来られる救世軍の方々の祈りが、私の心に深く入ってきました。

さんが安心して過ごせる環境をつくりたいと思い、他の民生委員と協力して「子どもたちのサロン」を立ち上げました。

制度は始まつたばかりで前例がなく、児童問題、特に虐待などに携わりました。一人ではできないので、皆さんと連携して一つ一つ闇をつくりました。子どもとお母さんが安心して過ごせる環境をつくりたいと思い、他

りとなりました。

現在の思い

役目をすることでした。残念ながらコロナ禍で施設に入れなくなり、今年の初めに横浜市では事業が打ち切りとなりました。

その後、介護相談員を市から委嘱され、十年ほど務めました。老健・特養を月一回ずつ二人一組で回り、利用者や職員の皆さんと顔なじみになつてお話しします。市から期待されていたのは、施設が密室にならなければ、外の風を入れるのは役目をすることでした。残

以上続けていて、今も月二回、二十五～三十組ほどの親子が集まっています。また、不登校の子どもたちのフリースペースを設けました。並んで一緒にご飯をつくりながら会話が生まれる時間を大切にしました。始める時、「三年がんばろう。だめならやめよう」と仲間と決めましたが、これも二十数年、発展しながら続いています。

地域での働き

エスにおいて、神が
あなたがたに望んで
られることです。」
サロニケの信徒への手
一 五章一六〇一八節

最後に、私の好きな
宝書の言葉をご紹介
します。

自分にはわからないことが、少しづつわざができる、それが今までいる。そのことをみると、自分の力ではきないことだと感神様の不思議な導き方を考えていました。

終わりに

ん方で、もし孤独を感じている方がおられたら、「一人で抱え込まないでください」とお伝えしたいです。相談できるところにつながりほしいと思います。中にはためらう方もいますが、人丈夫です。自分で抱え込まないでほしいのです。

はろう」という気持ちにち
ることができます。



地域で続いている子ども支援活動

〈日本〉全国大会の開催

日本の救世軍は2025年に創立130周年を迎え、11月に東京で全国大会を開催しました。国際本部より、南太平洋及び東アジア地域万国書記官のユサク及びウィディアワティ・タンパイ中将をゲストに迎えました。

11月22日(土)は中央区立日本橋公会堂で、「バンドレイジング・チャリティー・コンサート」を開催。救世軍ジャパン・スタッフ・バンドとThe Band of the Black Coltが共演し、特別ゲストのウィリアム・ハイムズ氏の指揮によるプラスバンドの豊かな響きに、会衆は聴き入りました。聖書のメッセージも語られました。

23日(日)は千代田区・日本教育会



バンドレイジング・チャリティー・コンサート

館にて、大会聖別会(礼拝)をおこないました。兵士入隊式(救世軍の信徒「兵士」となる信仰告白の式)もおこなわれました。ユサク・タンパイ中将が聖書からメッセージをし、祈りの時がもたらされました。同日午後は贊美集会が開かれ、カナン・プレイズ・チャーチの長沢崇史牧師をゲストに迎えました。贊美の歌を歌い、メッセージを聞き、祈り、恵みに満ちた時となりました。

各集会を通して、130年という節目を迎えて新たな一步を踏み出すため、神の恵みと力を受ける時となりました。



11/23 大会聖別会



11/23午後 贊美集会



救世軍とは? What is the Salvation Army?

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英國のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して救世軍の働きが始まりました。昨年、130周年を迎え、131年目の歩みをスタートしています。日本人で最初に救世軍士官となった山室軍平は、平易な言葉で聖書のメッセージを伝え、小隊(教会にあたる)を拠点として伝道を進めるとともに、廃娼運動や結核療養所の設立に、妻の機恵子と共に力を尽くしました。創立時代からの信仰のバトンが受け継がれ、現在、日本の救世軍では各地の小隊、病院、社会福祉施設(保育、児童養護、高齢者支援、女性自立支援、アルコール依存症者回復支援)を通して、神と人との愛し仕える働きを進めています。



救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

〈香港〉きずな献金2024による支援

救世軍女性部では毎年10月に「きずな献金(海外支援のための献金)」を実施しており、3カ年プロジェクトとして、①計画、②実施、③報告の各プロセスを踏んでいます。2024年の香港プロジェクト(虐待などによるトラウマを抱えた子どもたちが暮らすグループホームの改装)のためには、総額1,144,109円が献げられました。これについて現地の救世軍から報告が届いています。

救世軍が香港・ピンティン地区で運営するグループホームでは、きずな献金を通しての支援により、大規模な環境改善をおこなうことができました。トラウマケアの観点によるデザインに基づいて家具や棚の改修が進められ、子どもたちにはすぐに良い影響が見られたとのことです。新しい住環境は「温かい家庭」となり、子どもたちに安全で質の高い暮らしと、心の癒しを提供する場になっています。



←ひと息つけるスペースを設置し、気持ちを落ち着かせる場に



安心感につながる色使いやデザイン

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆
(子ども向け紙面)

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます! 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください!

